

1978年夏期講習の御講話(13)

苦と楽は常に相伴う

土から生じた木は、最終的には土に還る
ブラフマンから生じた創造物は、最終的にはブラフマンに還る
それらはただ異なるように見えるだけで、異なるものではない
このサイの言葉は、真理の道を教えている

清らかな真我の化身（パヴィットラ アートマ スワルーパ）である皆さん、
土の中に蒔いた種は大きな木に成長し、大きな木は枝や花や実などをつけます。
これらの枝や花や実、すべて土から生じていることに気づかなくてはなりません。
しかし、木の姿や木の各部分は、やがて時が来ればすべて消えてしまいますが、
これらの部分すべてが生じた土は永遠に残ります。それが基盤というものです。
同様に、ブラフマンから生じたものは、「プラグニャーナ」（神の叡智）という形で、
さまざまな形で自らを顕現させます。人間のすべての器官の中にはブラフマンの相が存在しています。
しかし、やがて肉体は年を取り、死んで消えてしまいます。この創造の型は、
私たちはあらゆる場所でブラフマンのプラグニャーナの相を見て認識することができる、
ということを教えています。ゴーピカーたちは、このすべては実際にはミッティヤー、
すなわち、真実ではないもの、であることを理解していました。

ゴーピカーたちは普通の女性ではありませんでした。彼女たちは何種類かのサーダナ〔靈性修行〕を実践しており、ブラフマンのこの相〔プラグニャーナ（神の叡智）〕が彼女たちの中に輝かしく示されていました。彼女たちは、まるでこの相を理解するためだけに生まれてきたかのようにでした。ゴーピカーたちは過去世ではリシ〔聖仙〕であった理想的な人々でした。彼女たちは、ブラフマンを完全に理解すればブラフマンと一体になることを知っていたのです。彼女たちは神性との一体化を確立していました。これは彼女たちによって「マディヤマ」〔中間にあるもの〕と言われていました。始まりには見ることができず、終わりにも見ることができず、その中間においてのみ見ることができるものは、「マディヤマ」と呼ぶことができます。私たちが今、創造世界の中で見ているものはすべて、神がそれを存在させる以前は存在していませんでした。カタストロフ〔大きな破壊〕が起こった後は、この世界を見ることはないでしょう。世界は、過ぎゆく雲のように、その中間の時間にだけ見ることができるものです。

こうした推論の道をたどるなら、すべての人がこの真理を理解するでしょう。
私たちは、自分は肉体が生まれる前に存在していたか、肉体が死んだ後に存在す

るのかを自問するべきです。人間の肉体が存在するのは、誕生と死の中間の期間だけです。今述べたことは、山々や木々や動物なども含む、私たちが森羅万象の中で見ているあらゆるものに当てはまります。これらはすべて、いずれ時が来れば永遠なるものに溶け込むでしょう。私たち自身の想像の産物である創造世界は、時間に溶け込むでしょう。私たちが周りで見ている一切のものは、時間と共に衰退せざるを得ないのです。

人間の中にある神性を認識するためには、一人ひとりが自分の性質と自分の真の姿を認識しなければなりません。生まれる前は、誰があなたの両親であり、友だちであり、親戚であり、敵でしたか？ この富は、庭園は、家は、畑は、いったい誰のものですか？ 私たちはどこからやって来て、どこへ行くのでしょうか？ 肉体が死んだ後、私たちはどこへ行くのでしょうか？ この肉体はどこから来ましたか？ 私たちは自分たちがやって来た元の住所を知らず、行き先の住所も知りません。私たちは（宛先の書かれていない手紙のように）屑籠（くずかご）に投げ込まれることでしょう。私たちはブラフマンからやって来て、最終的にはブラフマンへ還る、ということを悟らなくてはなりません。

真に、私たちは人間の無知の度合いを理解しようと努めなければなりません。今、私たちは、甘さを与えてくれる木々や花々を捨て、森の中の藪の低木を追いかけているかのようです。本来の目標を捨てて、偽物の後を追いかけているのです。ブドウの木のブドウに含まれている甘さを味わおうとせず、低木の茂みの中でラクダのように棘（いばら）を追いかけているのです。そのような行動のせいで、私たちは動物になっています。すべての人間の中に含まれている神性に気づき、自分の過去と未来のこの側面を調和させるよう努力しなければなりません。

ゴーピカーたちは、神の神性は遍在であることを明らかにしました。彼女たちは人間の姿をしていたので、人間の姿をとった神格〔神の化身〕を味わいたい、その人のそばにいたいと望んでいました。クリシュナがマドゥラーの都へ行った時、ゴーピカーたちの状態は通常の言葉ではとても言い尽くせないほどのものでした。クリシュナが遍在であるという真実に気づいてはいても、幻想とマヤー〔迷妄〕のせいで、彼女たちはクリシュナが人間の姿でその場にいないことを悲しく思っていたのです。

あるとき、ゴーピカーたちが内輪でクリシュナについて話していた時、一匹の大きな黒い蜂が彼女たちの真ん中に飛んできました。牧女たちの思いはただクリシュナだけだったので、クリシュナが自分たちの真ん中へやって来たのだと、牧女たちは感じました。あるゴーピカーは、その蜂の色をクリシュナの肌の色と比べはじめました。また別のゴーピカーは、その蜂の性質をクリシュナの性質と比

べはじめました。もう一人のゴーピカーは、クリシュナは肌の色が黒いので、その蜂は実際にクリシュナ本人なのだと思います。蜂の性質の一つは、花そのものには注意を払わず、花のもとへ飛んでいって花に含まれる甘い蜜を吸うことです。牧女たちは、彼女たちのハートに入ってきてそこにある甘さを吸い、牧女たちに何の配慮もせず去ってしまうという意味では、クリシュナも蜂と同じだと感じました。牧女たちは、自分たちを試すためにクリシュナが蜂の姿をしてやって来たのだらうと結論づけました。

別のゴーピカーは、その蜂には口に珍しい色をした触角があるので、普通の蜂ではないと言いました。もし若い蜂であれば黒い触角があり、老いた蜂であれば灰色の触角があるはずなのに、この蜂には赤い色の触角がある、と。また別のゴーピカーは、マドゥラーでクリシュナが赤いクムクムを付けていたゴーピカーと遊んでいた時、おそらくそのクムクムがクリシュナの上に落ち、クリシュナに触れた蜂にくっ付いたのだらう、という意見を述べました。こうして彼女たちは、その蜂は実際にクリシュナのもとからやって来たのだ、と結論づけたのです。それをもって、心の中に起こり得たあらゆる疑念は晴れ、牧女たちは、その蜂は実際、クリシュナのところから来たのだという確かな結論に到達しました。その蜂を見て、クリシュナと離れ離れになっていたゴーピカーたちは嫉妬しました。しかし、すぐに思い直して、主に近づいた者に嫉妬するのは間違っている、と自分たちの考えを改めました。

牧女たちは、主の恩寵を勝ち取ることでできる唯一の方法は、愛、プレーマを示すことだと感じました。それから一人のゴーピカーが叫びました。「ああ！ 蜂よ、帰ったらクリシュナに、せめて一度だけでも私たちを優しく見つめてくれませんか、と伝えておくれ」。別のゴーピカーは言いました。「少しの間、私の暗いハートに明るい光を灯してくれませんか、とクリシュナに伝えておくれ」。別のゴーピカーは、自分の人生は乾いた木のようにあり、その木に多少の命を蘇らせてほしいという祈りをクリシュナに伝えてくれるよう蜂に頼みました。それから、ラーダーがやって来て言いました。「クリシュナに、ここへ来て、粉々に打ち砕かれた私の人生を見て、それを修復し、花輪にしてあなたに掛けてください、と伝えておくれ」。ゴーピカーたちは、このような伝言の数々をクリシュナのもとへ持ち帰るよう蜂に託しました。

この話の隠れた意味は、ゴーピカーたちが見るものは何であれクリシュナに関わるだけだったということです。牧女たちは、自分たちのハートは純粹ではない、自分たちの人生は神聖ではない、と感じており、自分たちのハートを清め、自分たちの権利である目的地まで連れていってほしいとクリシュナに祈っていました。私たちが元いた場所へ戻りたいと思うのは当然のことです。この創造され

た幻影である宇宙の中では、苦痛と快樂、損失と利益は常に相伴います。「夫たちは怒り、姑たちは多くのやり方で私たちを痛めつけますが、それでも、私たちの思いは常にクリシュナと共にあります。クリシュナと離れていることほど悲しいことはありません」。牧女たちは、この世界は苦と樂の混合であるという真理を明らかにしました。姑たちはゴーピカーに数多くの苦しみを与えましたが、クリシュナへの思いとクリシュナのダルシャンは、彼女たちにすべてを忘れさせていたのです。

あるとき、バギーラタという王がガンジス川を〔天界から〕地上に降ろそうと試みました。ガンジス川はバギーラタに尋ねました。「あなたは、罪を犯した多くの人々に私が触れるようにして、私を汚そうというのですか？」。ガンジス川は、親切とは何かを知らない、エゴと身勝手さに苦しむ多くの罪人が自分に触れれば、自分も不浄になってしまうと感じたのです。そこでバギーラタは言いました。「おお！ ガンガー〔ガンジス川〕よ、罪人と同じくらい、大勢の神聖な人々や献身的な人々もおります。あなたがそうした人々に触れるなら、彼らの罪は取り除かれるでしょう」。ここで私たちは、いくつかの支流——清らかで神聖な支流や、あまり清らかではなく神聖でない支流——がガンジス川に流れ込んだとしても、ガンジス川の神聖さは変わらない、ということを心に留めておかねばなりません。こうした善悪の側面は、私たち自身の考えから生まれたものであり、どこか外からやって来たものではありません。

この真実はゴーピカーたちによって明らかにされました。牧女たちは、自分たちが苦しんでいる別離と自分たちが感じている悲しみは自分たちだけのものであり、クリシュナのものではないという結論に達しました。小さな赤ん坊が泣きはじめると、赤ん坊は自分の指先を吸い、何か汁が出ていると思って喜びます。赤ん坊は自分の味わっている汁が自分から出たもの〔唾液〕だということを知りません。それと同じように、犬は固い乾いた骨に噛み付き、歯茎に傷がつきます。歯茎が傷つくと出血しますが、犬はその血を〔骨の血だと思って〕吸って、とても喜びます。本当は、その血は外からのものではなく、犬自身から出ているものです。同様に、私たちの中の善と悪は、私たち自身の内から来たものであり、どこか外の場所や他の誰かから来たものではありません。

そのような平等心〔常に同じ心の状態〕を持っていたため、ゴーピカーたちの振る舞いは模範的でした。彼女たちはブラフマンを体験していました。しかし、私たちは、バーガヴァタやゴーピカーの物語を読むとき、彼女たちが平凡な女性であると誤解しています。牧女たちは平等心を持った帰依者たちでした。彼女たちには神聖なハートがありました。彼女たちにはまったく執着がありませんでした。エゴもありませんでした。牧女たちは日常生活でダルマを実践し、その人生

は他の人々にとってのお手本〔理想〕でした。今日、私たちはゴーピカーやゴーパラータたちのように生きようと努力しています。このようなことは、体験できるのみであって、言葉では説明できません。私たちの人生は欲望でいっぱいです。欲望が消えた日、私たちは神聖なハートを手に入れるでしょう。嫉妬とエゴがとても重要な地位を占めています。私たちが嫉妬とエゴでいっぱいになっているかぎり、クリシュナの神聖な面を理解することはできません。

今日、皆さんは、神を唯一の实在と考える、ひたむきな信愛を育てなければなりません。単なる利己的な理由のために神の恩寵を得ようとすべきではありません。万人の中にある神性と神の遍在に気づくよう努力しなければなりません。私たちの人生は、万人の中にある神性に気づき、主の恩寵を勝ち取るために捧げられなくてはなりません。

愛の化身（プレーマ スワルーパー）である皆さん、

この世に存在するあらゆるものは、遅かれ早かれ消滅します。いつか消えゆくこの肉体のために、それほど多くの努力をするのは望ましいことではありません。もしそのようなやり方を続けるなら、それは私たちの人間性の汚点となるでしょう。この地上には、王国を支配し、その財産を誇った王たちがいませんでしたか？ 今、彼らはどこにいますか？ 夫の命を救い、ヤマ〔死神〕に勝利することができたサーヴィトリは、この栄えあるバーラタの国で生きていたのではありませんか？ 内なる力〔純潔の力〕で森林火災を消すことができたチャンドラマティー〔ハリシュチャンドラ王の妃〕は、この神聖なバーラタの国で生きていたのではありませんか？ 何も恐れずに火の中に入ることができた大地の娘シーターは、この皆さんの母国で生きていたのではありませんか？ 実際、バーラタはそのような偉大なパヴィットラ アートマ〔清らかな真我〕たちや神聖な人々に誕生を授けましたが、その人々は今日、存在しているのでしょうか？ ハリシュチャンドラは、あらゆる状況下で真実を守り抜いた偉大な王でした。彼は今、存在していますか？ ナラ王は一時、世界を支配しました。彼は今日、生きていますか？ シュリラーマは大海そのものに橋を架けました。ラーマは今、存在していますか？ このように、すべての人間の肉体は、時の経過と共に消えてしまうのです。私たちは、肉体がまだ生きている間に神聖な人生を送り、主の恩寵を手に入れるよう努力しなければなりません。

ゴーピカーたちの考え、思い、行動は、すべてクリシュナに捧げられました。一方、今日の帰依者は、自分はクリシュナに全託していると言いますが、彼らがしていることは、ただ自分の願望を満たすことだけです。そのような考えは、決して私たちが望んでいる正しい結果を与えてはくれません。若者である皆さんは、理想的な信愛と信仰の手本をこの国の他の市民たちに示さなければなりません。

清らかで無私無欲の人生を送ることは、まさに必要不可欠です。皆さんはどんなエゴも持つべきではありません。神聖な思いを抱いた時、初めて皆さんは主の恩寵を手に入れることができるでしょう。

ダルマの原理が、人間の行動の基盤を形作ります。私たちは人間として生まれてきました。私たちは人間として生きていますが、動物のように振る舞っています。私たちの行為や行動は、動物たちの行動よりも悪いものです。学生たちが集まる場所は平安と安心の場であるべきですが、今日、学生たちが集まる場所は恐ろしい不安な場所になっています。皆さんはこの汚点を取り除こうと努めるべきです。こうしたすべての物ごとには、人の感覚器官をコントロールすることが重要です。

人が自分の感覚器官をコントロールできるように、バーガヴァタはいくつかの方法を教えています。これまで 13 日間、皆さんはバーガヴァタの物語を聞いてきました。この聖典の各項目は、人類の理想的な手本となるように意図されています。バーガヴァタの物語は完全に愛で満たされています。愛の完全性から出てくるものも愛でいっぱいです。充満と完全性から生じるものも、充満していて完全なのです。無限なるものと充満の源から、もし充満を取り除いたとしても、残るものはやはり充満です。これが、「あれは満、これは満、満から満を取り去っても、残るものは満」という格言の意味するところです。

私たちは皆、不死の源から来たものであり、私たちも不死なのです。不死でないものは滅びる肉体です。神の具現である愛という相は、「ラソー ヴァイ サハ」〔まさしく（ヴァイ）それは（サハ）甘さなり（ラサハ）〕という言葉で説明されています。愛という相はラサ〔甘さ〕から生じたものであり、ラサ〔甘さ〕から生じたものは常に強くなければなりません。ただ、私たちが身勝手さと弱さを助長するせいで、愛が時おり弱く見えることもあります。私たちは神聖な生を授かりながら、それを不浄な道に沿わせて歩んでいるのです。これは他の誰かの責任ではありません。自分のことは自分に責任があります。もし自分を正したいと望むなら、神聖な道に入らなくてはなりません。このような神聖な話を聞いて、学生諸君が自分の中にある不純さを取り除き、強く健康になることを私は望んでいます。

サイババ述

Summer Showers in Brindavan 1978 Ch13